



# 当たり前のことを 当たり前にしておかない 研究は永遠の好奇心

大学院社会産業理工学研究部  
心理学分野(社会総合科学域) 教授  
佐藤 裕 (さとう ゆたか)



## 言語障害の深層を探る

私たちの周りには、それがどのようなプロセスでそのようになるのか、考えてみればわからないことがたくさんあります。ただ、それらの事象は当たり前すぎて、あえて「なぜ？」と思わないし、知らなくても困らないかもしれせん。

例えば、赤ちゃんがどのようにしてことばを覚えるのか、と考えたことがありますか。そんなこと知らなくても勝手に覚えますからね。しかし吃音や失語症など、日常生活の障害となることがあれば、その原因を探り、治療法や薬の開発などをしていく必要があります。

佐藤先生は、私たちがどのようにして音やことばなどを脳の中で処理し、情報として知覚・認知しているのかといった、聞こえ・ことばの問題について研究しています。

## 脳機能計測を用いた 言語・吃音研究

写真で赤ちゃんが頭に付けているのは「近赤外分光法(NIRS)」と呼ばれる脳機能計測装置の乳児測定用の端子です。この近赤外分光法は、近赤外光を使って脳の血液に含まれるヘモグロビンの変化量を算出することで、頭皮の上から脳機能を測定することができます。言語機能をよかんなどの診断に補助的に使われています。また、この装置は乳幼児の脳反応を比較的容易に測定でき、この装置を用いた研究により赤ちゃんがどのようにしてことばを覚えていくのか、といった発達も徐々にわかってきています。佐藤先生は、乳幼児に

ここでは、左の言葉が表すインクの色の下  
の空欄にチェックしてください。例えば、最  
初は、あおですから、左から3番目の空欄に  
チェックすればよいのです。

あ	お						
み	ど						
あ	か						
あ	お						
き	い						
く	ろ						
み	ど						
く	ろ						
あ	か						
き	い						

(図)

おける脳での言語処理機構や言語  
発達過程を調べるとともに、吃音  
者や吃音を有するお子さんの言語  
処理も調べています。

## 行動反応・心理テストも 必要

このように、言語発達や言語障  
害に関する未知の部分が少しずつ  
明らかになることで、基礎研究が  
臨床や製薬の場にフィードバック  
されていくことが期待されます。



## 治療へ向かう基礎 研究の最先端

佐藤先生が特に取り組  
んでいる、言葉がうまく  
話せない吃音症は、症状  
の度合いに個人差があり、  
その原因や悪化要因もいろいろと  
考えられています。成人では精神  
障害、脳の障害などにより併発す  
る場合もあります。



かつては単に緊張や不安による  
精神的なものと考えられていまし  
た。その後、ドーパミンやセロト  
ニンなどの脳内の伝達物質の分泌  
異常が関与している可能性も指摘  
されてきました。が、それらの伝  
達物質がどのように影響している  
のかはまだわかっていません。

「ただ、一人一人違うと言っ  
ても、吃音という症状には共通する  
基盤が、一つではないにしても、  
あると考えています。そこに研究  
の行く先も見えてくるわけです。

基礎研究ですから、すぐに治療に  
使えるとか、薬が開発されるとい  
うわけではありませんが、非常に  
大事な研究をしているとの思いで  
やっています」

と、佐藤先生は五里霧中を歩み  
ながらも、根気強く研究に取り組  
んでいます。